

存在することという謎に、ハイデガーは過去の哲学者、詩人などと対話するという仕方で近づいた。30年代からは、ソクラテス以前の思索者たちが大きい手がかりとなった。本発表では、「ギリシャ人が思考したことをもっとギリシャ的に思考する」ことを自分に課した彼によるアレーティアやピュシスの解釈から出発し、存在するものが現出し隠れる場を、アーレントなどにも学びながら、死すべきものたちの公共空間として粗描したい。

ハイデガーによれば、アレーティアは隠されていないこと、ピュシスは存在することである。アレーティアは存在するものが立ち現れ隠される場所（現、明るむ場 *Lichtung*）である。ピュシスとは、隠され現前しないことから隠されずに現前することへの、そして隠され現前しないことへの移行であり、隠れとの抗争のなかで、明るむ場に現前して輝きしばし留まることである。この解釈はもはやギリシャの思考の再現ではない。ハイデガーは一時期、ソクラテス以前における「最初の始まり *Anfang*（アルケー）」と、「別の始まり」とを区別した。最早期のものが究極のもの *eskhaton* として到来するのを期待する「存在の終末論 *Eschatologie*」という預言めいた隠語が造られたのもそのためである。しかし、別の始まりないし究極的なものの到来は、年代記のなかに客観的に位置づけられる未来の事件ではなく、アレーティアを可能にする明るむ場がそれとして思考されることである。明るむ場とは来るべき事象、「既在の到来」、将来するアレーティアである。

そうすると、この場で生じる現前と非現前の、隠れなさとの争いという、存在することの運命に応じるのが人間の思考である。存在することと思考することが同じだというパルメニデスの箴言はここから理解される。

明るむ場を超感性的な領域として、存在をプラトン主義のイデアとして捉えてはならない。レーヴィトは、存在が感覚できる存在するものとしては自らを示すがそれ自身としては退くというハイデガーの構図に、神の死後における二世界論を嗅ぎとったが、これは存在するという出来事と存在するものとの取り違えである。運命を送る存在をいわば人格神化してはなるまい。存在することと存在するものとは襞の両面のように二つでありながら一つ *Zwiefalt* である。存在するものとそのつど出会い、自らの生を生きることが、存在することの明るむ場に帰属すること、現を存在することである。存在することを忘れ、総駆り立て体制 *Ge-stell* というテクノロジーの本質に組み込まれた私たち現代人も、それと知らずに明るむ場に帰属している。

この明るむ場は、ハイデガーによると、ギリシャにおいてポリスというかたちをとった。ポリスは「ギリシャの人間が歴史的に滞在する場」であり、ポリスのなかに立つとはこの地上に滞在することを意味する。ポリスは権力の本質とは無縁で、国家という政治的なもの以前のものであり、政治や倫理が生じる場所である。アーレントにも類似した区別があ

る。世界ないしポリスは「個人とその仲間たちの間で作られたはずの間のもの in-between」であって、政治はこの場所で成立する。

ところで、明るむ場に帰属するのは複数の死すべきものたちである。そうだとすると、ポリスは複数性の公共空間 *Öffentlichkeit*、あるいは時間 - 遊動 - 空間である。公共空間とはさしあたり、複数の人間たちがしばらく共にとどまり、存在するもののありさまが立ち現れ隠される場、というほどの意味である。アーレントによると、ギリシャ人が生の重荷に耐えられたのは、ポリスが生を輝かせたからであった。自由な行為と生きた言論の公的領域であるポリスは永続し、人間は偉大な業績や言葉を残すことによって不死性を獲得する。この永続性 *permanence* や不死性はイデア論的な不動の永遠性 *aeternitas* ではなく、ハイデガーの解釈するアエイ・オンと同じく、不断に現前し続けること、相対的不滅である。死すべきものたちは、非現前の闇からこの世に出現し、ポリスという公共空間に参入し、行為と言葉によって自他を顕示し競い合い、やがて再び闇へと身を隠す。しばしの現前ではあるが、残したものは公共空間の記憶のなかに現前し続ける。

しかし、ポリスや各人の行為が不断に現前し続けられるというのは、第一に公共空間とそこに生きる人間との可滅性の忘却である。第二に、異他なるもの（アーレントの言い方では「絶対的に異なる人々」）が私には現前せずに存在しているということを隠すことである。「自らに固有なものをわがものにするには、異他なるものと対決し、歓待して対話することとしてのみ存在する」（ハイデガー）。この異他なる客——私に現れながら隠されたものだけが客である——は沈黙する人間や死者、犯罪者でもあるだろう。公共空間は、これらの人々が共に、また種々の存在するものが顕現し隠れつつしばし存在する場所である。

テクノロジーの本質が支配し、自然と人的資源の確保を競い合う時代に、死すべきものたちの可滅的な公共空間が新しく誕生するという別の始まりは、この不可能な可能性は、何らかの仕方でいまここに到来するだろうか。